

(69)0612 学習は、模倣に始まる

締め切り 060915060901 提出

模倣と盗作

先ごろ、日本人の芸術大学教授をした某画家が、イタリ人画家の絵を盗作したということでマスコミに騒がれました。確かに、新聞・テレビの画面に出てくるイタリ人画家の絵と某画家の絵は、構図も色彩も極めてという位よく似ていて、意図的に模倣したか、頭の中に画像として残っていたことが影響していたのか、明らかに類似していました。

私は、この問題がマスコミに取り上げられて社会の表面に表れだしたころから盗作という呼び方に疑問を持っていました。絵を上手に描きたい人が、美術館に飾られている高名な画家の絵を何日もかかり、繰り返し何枚も模写することがあるということを聞いたことがあります。むしろ、このやり方は、上

手になるための、一般的なやり方であると理解しています。できあがった絵を模写、あるいは模倣といっても、盗作という表現はしないようです。意図的に、金銭・名声を得ることを目的とする模写を盗作というのかとも考えられますが、テレビ番組「お宝拝見」でも盗作という表現を見たことはありません。

これは、私の勝手な解釈ですが、模写にもある種のオリジナリティーがあることが評価されているからでないでしょうか。どんなに上手に模写しても、もともとの原画とは異なり、その人なりの芸術的感性が加わったものができると思うのが常識的といえるでしょう。皮肉なことに、原画より模写したものが高い評価を受けることもあるらしいのです¹⁾。人の好き好きで、蓼食う虫もなんとやらの表現があるくらいですから。。。

ただ、常識的な社会では模写した絵があまり人目につかないのは、模写・盗作などという謗りを受けることを避けるからであると

考えられます。とはいいいながら、20年くらい前、都内某有名百貨店で古代ローマ・ヨーロッパの贗作彫刻が、百貨店側ではそれと知りながら、買い手は知らずに売られたことがありました。

模倣は独創の母

同じく、芸術と呼ばれる音楽の世界では、少し様子が違うように考えられます。過去の作曲家で演奏家がつけて楽譜に残した楽曲を現代の演奏家が演奏しても、これを盗作とはいふことはありません。これは、現代の演奏家の音楽的感性の独自性が認められているということでしょう。小林秀雄が、「模倣は独創の母である」²⁾といったのは、まさにこのことだったと考えられます。

論文の引用は模倣

私も、医学研究者の端くれとして、医学論文なるものを結構な量という位、長年に

わたって書いてきました。そこで、ある年齢になってから、いつも気になっていたのは、引用、あるいは参考文献をどう考えるかということとした。引用・参考の段階は、知的作業としては、絵画・音楽などにおける模倣に相当すると考えられます。それに著者の個人的判断による意味づけを加えて考察する段階に至ったときには、単なる模倣から離れて独創に入るものと考えられます。しかし、模倣か、独創か、そして独創性の強さの評価は、極めて微妙であり、判断する人の主観に頼らざるを得ない問題であると考えられます。

論文を書くときには、現代では図表を補助的に援用しても、言語で表現することになります。基本的に、主に母親から一般的な言語を習得し、あるいは専門的な言語、すなわち専門用語を経験のある上級専門家などから習得する、あるいは学習することは、まさしく模倣によります。正確な学

習には正確な模倣が必要です。これは、絵画の模倣と同じく、いってみれば盗作なのでしょう。しかしこのような場合、盗作ということはありません。某画家の場合、ごく初期的な段階では模倣だったのかも知れません。しかし、少し進んだ段階では独創性を完全に否定するのは難しいと考えられます。模倣 = 盗作と独創性を分ける基準は極めて主観的で、したがって恣意的であるといわざるを得ません。現代では、まだ人間の脳の機能的な作業を客観的に評価する信頼できる手段はないからといえます。

文字で表現する場合、意思の表現が比較的明確で、したがって判断にもあまり差異が出てこず、評価の程度もあまりバラ付かないように考えられますが、必ずしもそうともいえません。例えば、極端な例として「好きなようにしなさい」と表現したとき、腹を立ててしまって、「勝手にすればよい」という意味の場合と、全く好意的に「お好きなようにし

ていいですよ」との場合があり、意味がまったく変わってしまいます。多くの場合、前後の関係から類推することができるでしょうが、曖昧さが残ります。私の好きな「いい加減」という言葉も、いい(湯)加減という時と、出鱈目さの入るいい加減とでは全く意味が違ってしまいます。

文脈に戻って、論文を書くとき、基本的な言語でも専門用語でも、さらにそれらがつながった比較的短い文章、すなわち知識も頻繁に使っているうちに、どこでだれに習ったのか忘れてしまっているのが一般的です。引用 = 模倣する場合には、引用の原典を示すのが求められていますが、現実的には不可能な状況になってしまっているのが、普通といえます。常識的にといういい方の範囲内で、一般的に汎用される知識は、自由に使ってよいということになっていますが、厳しく考えると、かなりいい加減な判断にしたがっているといえます。

実は、今から10年くらい前、わたしがそれまでの関心の中心であった近代科学に依拠する人工臓器・血液浄化などから、興味が現代ではいまだ非科学的医療である補完・代替医療へと移り始めたとき、このことを強く意識していました。それで、新しく補完・代替医療、生命学、文化人類学、科学哲学などの資料を読むに当たっては、抜き書きを作って、ついでにスライドとし、その際必ず出典が明らかになるようにしておきました。だれが、どんな資料に、何といったことを引用したかを確実に分かるようにしたのです。しかし、こういうやり方ができるのはむしろ例外的で、だれが、どこでいったか分からないまま頭の隅っこに残ってしまっていて憶えているのが普通のことでしょう。模倣 = 盗作と、独創とは完全に分離することは至難の業といわざるを得ません。

某画家の盗作問題が明るみにでたとき、マスコミだけが大騒ぎをしたのに対し、いわゆ

る画壇などからの芸術論争がまったく聞こえてこなかったのが、わたしには不満でした。わたしの考え方が間違っていたのでしょうか？

参考文献

1) 小林秀雄：雪舟。モーツァルト・無常という事、p143、新潮文庫 草7D、新潮社、東京、1961。

2) 小林秀雄：モーツァルト。モーツァルト・無常という事、p54、新潮文庫 草7D、新潮社、東京、1961年。

挿絵：コートダジュール

南フランスから北イタリアにかけての地中海沿岸は、コートダジュール *cote d'Azur* として知られています。風光明媚ですが、魚料理がとっても美味しいのです。魚好きのわたしには、連日食べても飽きが来ません。

